

特集にあたって：「周縁から見た中国文化」という視点

著者	藤田 高夫, 藪田 貫
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian Cultural Interaction Studies
巻	2
ページ	5-6
発行年	2009-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/3188

特集にあたって

—「周縁から見た中国文化」という視点—

藤田 高夫・藪田 貫

グローバルCOEプログラムの推進組織である関西大学文化交渉学教育研究拠点（略称ICIS）は、東アジアにおける多様で複合的な文化様態を、「文化交渉」という視点から切り込み、東アジアの新たな文化像を描き出すことを、最終的な目標の一つとして掲げている。本拠点が目指す方向は、従来の一國文化に局限された文化研究の枠組みを脱し、他者との「関係性」の中で東アジアの諸文化を位置づけようとするものである。もとより「文化」の内容は多義的であり、「文化交渉」が包含する現象は広範である。それを十分認識した上で、私たちはいくつかの仮説的段階を踏みながら、方法を検討し、対象を選択していくこととした。今回の特集「周縁から見た中国文化」は、その試みの一つである。

キーワードとしての〈周縁〉

東アジアの、ある特定の文化、あるいは地域を探求する際に、その文化や地域にスポットを当てることが研究の原初の第一歩であることは、いうまでもない。そのスポットは、対象の本質を把握するために、なんらかの〈中心〉あるいは〈核〉を措定し、そこに集中することになる。そこから純化された文化諸相を抽出する方法がとられてきたのである。

しかし、このような中心指向の文化研究は、「単独で形成された純粹培養の文化」という、あまり現実的でない文化像を将来しかねないものであろう。他者との関係性を含めての文化研究をめざすならば、従来の中心指向的アプローチとは異なる方法と意識が必要となる。そこで、特定の対象に向かい合いながら、他者を含み込んだ視角を与えてくれる方法として、私たちが試みたのが「周縁アプローチ」である。

「周縁アプローチ」には、「周縁から見ること」と「周縁を見ること」の二つの方向性がある。そもそも〈周縁〉を設定すること自体が、〈中心〉を定めることの反作用なのだから、中心指向に他ならぬではないか、という疑義が生じるかも知れない。ここで強調したいのは、私たちは「対象」という以上の意味を〈中心〉〈周縁〉という言葉に付与してはいないという点である。そこからは優劣・強弱の価値判断がひとまず、脱色されている。

もとより〈周縁〉の概念も重層的・複合的であり、それについては次の小田淑子氏が論及しているとおりである。しかしながら、他者との関係性を含み込んで特定の文化を探求するためには、〈周縁〉を意識的に取り込むことが有効な方法であることに私たちの間で異論はない。本特集を構成する諸論文は、〈周縁〉をキーワードとした東アジア文化論の一つの試みなのである。

ハブとしての「中国」

本特集では、「対象」としての中心に、中国が設定されているが、これには二つの理由がある。一つは、本拠点メンバーでは、中国研究者の占める比率が最も高く、中国を対象として哲学・歴史・文学の各分野から接近することが捷徑であろうという研究遂行上の選択である。ただし、これが主要な理由だったのではない。

かつて東アジア文化圏という概念が盛んに唱えられたとき、前提とされたのは、「漢字」「儒教」「仏教」など、中国で生まれ、あるいは変容した文化要素が東アジアに共通して受け入れられたという現象である。しかしこれは、中国文化の優秀さを示唆しているのではない。むしろ私たちは、東アジアの諸文化交渉における「文化的ハブ」としての位置づけが、中国に相応しいと考えている。冊封体制、朝貢貿易体制に見られるように、中国は東アジア諸地域を政治的・経済的に結びつける結節点として機能してきた。東アジアの諸文化を位置づけるためには、かかる中国文化の相対的位置を定めることが、不可欠の作業であると判断したのである。

研究班活動のステップ1

そのために、研究の開始時点で私たちは4つの地域研究班を組織した。「北東アジア班」「沿海アジア班」「内陸アジア班」「域外アジア班」である。そこには中国のみを扱う研究班は含まれていないが、空間的に中国を取り囲むような配置になっているのは、如上の「中国文化」へのスタンスを定めることが、各研究班の結節点となることを予想していたからである。

本特集は、各研究班の活動の中間報告的性格を有するものでもある。中国を対象とするアプローチは以後も継続していかねばならないが、次のステップとしては中国を周縁と位置づける視点からのアプローチである。「中心-周縁」の関係は固定的なものではなく、対象の設定によって可変的であるべきである。その意味では、新たなステップを迎えるためには研究班の再編成も視野に入れねばならないだろう。